最優秀賞

「看護師として、母として」

受賞者：糠塚 真由子さん

日々の仕事は絶えず忙しい。家庭ではまだ小学生2人の母としての役割もある。しかし、1人でも多くの看護師、特に今仕事を続けていこうかと考えるママナースに私の体験を知って欲しいと願い、ここに想いを綴る。

来年度からは看護専門学校への異動が決まり、臨床で働く看護師は最後となる冬、事件は子供たちと出かけた先で起こった。私の目の前で女性が倒れていた。第一発見者の私は思わず、

「大丈夫ですか?」

と声をかけた。返答はない。そこからＣＰＲ（心肺蘇生法）が始まった。小学5年生の長女には思わず

「足持って！」

と移送の応援を依頼した。近くの方々にも応援を依頼し、私の指揮で行うＣＰＲ（心肺蘇生法）。救急要請、ＡＥＤ確保、その間も心臓マッサージを続ける。仕事以外で初めて遭遇するこの状況に、私の心臓マッサージの手は震えていた。しかし、（やるしかない！）。私の心はそう叫んでいた。応援者で交替しながら有効な心臓マッサージを行い、救急隊の到着を待った。

搬送が終わり、子供たちの気分を鎮め、帰路の車へ乗り込む。私は全身の力が抜け、運転だけに集中していた。すると長女が私に向けてぽつりと言った。

「ママ、かっこよかった。私もママみたいになりたいと思った」

と。不規則勤務で夜もいないことがたびたびあり、寂しいと訴え続け、「私はナースになんて絶対にならない！」そう言っていた長女から発せられたその言葉を、涙なくして聞くことはできなかった。

（家庭との両立に悩み、退職しようかと何度も迷ったが、今まで臨床で働く看護師を続けられて本当に良かった）と、心から思えた日であった。

次世代を担う我が子に自身の体験をもって「私も倒れている人に声をかけられる人になりたい」という想いを与えられた私は、なんと幸せだろうか。仕事と家庭の両立で忙しく、体はとても疲れていたが、心は満たされた。この体験を今度は1人でも多くの看護学生に伝えていき、働き続けられる看護師が増えていくことを願っている。